

地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報

sokyu 蒼穹

2018.3 Vol.130



「第2回短大フォーラム」全国の短大の教職員と学生が意見交換(詳しくはP.11をご覧ください)

特集

COCを締めくくるにあたって

～採択から5年 補助期間終了へ～ P.02

- 研究ブランディング事業の背景とねらい
ー手つかずであった現役世代の運動指導への着目ー P.06
- Bリーグの信州ブレイブウォリアーズと連携協定調印 P.07
- 卒業研究・卒業論文発表会／大学院修士論文審査発表会 P.08
- 「第2回短大フォーラム」全国の短大の教職員と学生が意見交換 P.11
- 第3回APフォーラム開催 P.11
- 「第4回あるぷすタウン」に小中学生374人が参加 P.12 ほか

COCを締めくくるにあたって ～採択から5年 補助期間終了へ～

平成25年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に、本学が申請した「地域の新たな地平を拓く牽引力、松本大学」が採択されてから5年が経過し、3月で補助期間の終了を迎えます。今回は5年間の活動を通じて見えてきた、地域貢献に向けて本学が取り組むべきテーマや、着実に根付き始めた地域貢献活動についてご紹介します。

(松本大学 地域連携戦略会議 議長 木村 晴壽)



補助事業としての COC採択

文部科学省による“地(知)の拠点”整備事業(通常は、Center Of Communityの頭文字をとって“COC”と呼ばれている)は、平成25年から5年間の計画で開始されました。総予算額の規模からみて、この種の補助事業としては恐らく最大級のプロジェクトと考えてよいでしょう。“地域社会の新たな地平を拓く牽引力”をテーマとする本学の取り組みは平成25年度に採択され、本29年度をもって無事終了することとなりました。

当初は、1大学あたり年間約6,000万円の予算で5年間継続するとの計画でしたから、本学を含め採択された各大学にとっては総額3億円となる強力な補助事業です。それだけに、初年度の25年度に申請した全国国公私立大学の数は300、全国の大学数が約770ですから意欲ある大学はほとんどが申請したことになります。最終的に採択されたのは48大学で、すべて29年度に最終年を迎えましたが、国家財政の状況が相変わらず厳しいうえ、COC事業が進行中の27年度からCOC+事業(COCプラス=地[知]の拠点大学による地方創生推進事業)が新たに導入されたこともあり、COCの予算規模が当初計画を大きく下回り始めたのは予想外でした。もっとも本学は新たなCOC+事業の実施校にもなっていますから、トータルの補助額は計画実行に見合った規模を維持している現状にあります。

あらためて、 COC事業とは

COC事業とは何かをわかりやすく言えば、大学の教育・研究・社会貢献活動を地域志向にし、大学が地域再生・活性化の拠点になることです。本学は、地域貢献・地域密着を標榜し平成14年に開学して以来、一貫して地域志向の教育・研究を柱とする大学づくりを進めてきました。その結果、地域志向を特色としたいわば“松本大学カラー”はすでに高等教育界に定着しつつあったので、本学の目にCOC事業は、まるで松本大学をモデルにしたプログラムのように映ったというのが正直なところです。

地域志向でかなり先行していた大学としての難しさ、やりにくさは、まさにそこにありました。先行モデルのないなか、地域志向の大学づくりをさらに発展させるにはどうすればよいのか、という難問に直面していたのです。ここではその状況を踏まえ、COC事業開始当初からこれまでずっと続く本学の課題について、少し考えてみることにします。

大きく捉えると、本学が目指すべきテーマは、次の3つに絞られます。

テーマ①

量から質への転換

一つは、量から質への転換という問題です。地域志向の大学づくりを目指す文部科学省がCOC事業を通じて各大学に求めたのは、教育面では地域関連科目の導入あ

るいは増加でした。これまで全く地域に関心を持たなかった大学には、とにかく地域関連科目を設置せよ、それなりの科目が多少なりともある大学には、その科目数を増やせ、と要求したわけです。ところが、COC事業が始まるまでに本学ではすでに30～40の地域関連科目が設けられており、現実には飽和状態でした。当時の本学にとっては、地域関連科目数を増やすことよりも、それら科目の内容をどのように充実させるか、量から質への転換が課題となっていたのです。もちろん、授業科目だけのことではなく、地域志向の教育を高等教育としてどのように成立させるのかという意味で本学は、量から質への転換を模索していた段階でした。そこへ降って湧いたようなCOC事業、しかもほとんどは地域志向の量を問うようなCOC事業ですから、むしろ当惑さえ覚えました。

地方分権から 地方創生へ

文部科学省は20年以上も前から、いくつかある大学像の一つとして地域志向タイプの大学を想定してはいましたが、その中味についてはまったくと言っていいほど示すことができずにいました。その背景には、地域あるいは地域社会なるものがとにかく扱いにくい分野であること、そして何よりも、この分野が学問的蓄積に乏しい領域だという問題がありました。

その文部科学省が一挙に地域志向へと舵をきった背景にあったのが、東京への一

極集中問題であることは明白です。実は、日本全体を地方創生へと駆り立てた日本創成会議のレポート(いわゆる増田レポート)は、COC事業が開始された翌年に出されており、その影響で始まったのはむしろCOC+の方です(そのためCOC+事業はいかにも唐突な感じが否めません)。COC事業はむしろ、“地域の課題は地域で解決を”という、地方分権からの流れが強かったように思われます。

いずれにしろ、本学としては独力で地域志向の質的充実を目指す他なかったし、COC事業の最終年を終えようとしているいま、その課題を克服できたとも言い切れません。

テーマ②

地域課題とは

そこに本学にとってのもう一つの課題が関わってきます。いわゆる地域課題です。あるいは、地域課題のとらえ方というべきでしょうか。

教育・研究・社会貢献のすべてにわたって地域志向を鮮明にすることが求められたCOC事業でも、どのような地域課題を念頭に置いているのか、またどのようにその課題を解決しようとしているのかを明確にしなければなりません。文部科学省が想定していた地域とは、明らかに市町村単位の自治体、または県でしたから、そのことが課題の把握を曖昧にした嫌いはあります。例えば、原発や火山噴火のような特定の地域に関係した地域課題は確かにあるでしょうが、それを除いて、ある特定の地域にだけある課題というのはなかなか想定し難いはず。現代社会で問題となっている事柄を次々に思い浮かべてみても、それらが地域の問題であるかどうかは、かなり怪しいように思われます。現代日本の最大のテーマといってもいい高齢者問題ひとつをとっても、地域ごとの対応で埒が明くような問題ではないし、その他の課題にしても、やはり地域課題というにはかなり無理があるのです。でもその一方で、地域社会を基盤にしたビジネスがあちらこちらの地域で展開しているのも事実ですから、地域ごとに、例えば経済基盤のありようが違うということを一概に否定することもできません。

もっとも、自治体の中のさらに小さな範囲で、目の前にある課題をあげつらうことならば、比較的容易にできるはず。例

えば、松本のある地区には他地区にはない特別な施設があり(公共施設でも民間企業の工場など、あらゆることが想定されます)、そこから発生する課題という意味ならば、地域課題は確かにあるのです。私たちが念頭に置くべき地域課題とは、そのような、いわば地区課題割ともいえるべきものだと割り切ることが今後は必要になるのではないのでしょうか。

テーマ③

高等教育としての地域志向

課題の第三は、高等教育機関としての地域志向をどのように構想するかです。

地域志向の大学という場合、それが義務教育でないのは言うまでもなく、高校教育の上にある高等教育水準での地域志向を考えることとなりますが、大学での教育・研究との関連で上記のような地域課題をどのように取り扱うのかに難しさがあります。

では、地域志向に関して量から質への転換をはかり、併せて地域課題を具体的に想定し、高等教育機関ならではのアプローチをするとなると、具体的にどう考えればよいのでしょうか。もちろん、この明確な答えがないから、地域志向の大学なるものの中味を鮮明に示せないでいるということなのですが、それでも、手がかりはあります。

定着の仕方を射程に

現代の義務教育、高校教育で実施されているいわゆる総合学習・地域学習と、大学での地域志向教育とを明確に区別しようとするれば、まずは、教育の中味というよりはその置かれた位置を考えるのが近道のようなようです。すぐ後には実社会との関わりが始まる、つまり多くの場合、最後の教育段階にあたるのが大学教育だということになります。大学での地域志向教育のあり方は、そこから導き出す他ありません。

そうすると、地域志向の大学教育は、学生が将来的に地域社会に定着することを目指すのは言うまでもなく、どのようなかたちで定着するかを問題にせざるを得ないこととなります。地域志向の大学教育は、何らかのかたちで学生が選択する職業との関わりを持たなければならない、ということになります。もちろん、大学での教育が将来の職業に直結する場合もあるでしょうし、直接的ではないとしても、地域社会に関する学びが何らかのかたちで職業生活に活かされるケースは様々にあるでしょう。いずれにしても大学での地域教育は、どのような職業に就くのか、その上でどのように地域社会と関わってゆくのかを、確実に射程に収めなければならない、そう考えられるのです。

松本大学COC概念図



本学の理念を体現する “地域づくりインターン”

地域社会に貢献する能力とともに、近い将来の職業選択を見据えた大学での地域志向教育、その試行的モデルケースとして注目が集まっているのが、松本市と松本大学が連携して実施している“地域づくりインターンシップ戦略事業”です。具体的には、新卒・既卒を問わず、学生時代に十分に地域活動を経験し、なおかつ地域づくりに対する強い意欲を持つ本学卒業生を毎年度5名ずつ選定し、松本市は彼ら彼女らを“地域づくりインターン”に任命します。“地域づくりインターン”は、松本市内35地区に設置された地域づくりセンターのいずれかに所属して地域づくりに関わる活動を進める一方、定期的に母校松本大学で講座に参加したり、活動について教員からアドバイスを受けたりしながら、地域づくりに関する調査・研究報告書を作成する作業に従事しています。彼らは、“地域づくりインターン”であると同時に、松本大学地域総合研究センターの調査・研究員でもあり、同センターから調査・研究の委託を受ける立場でもあるからです。

各種活動に従事し、本学の地域総合研究センターの調査・研究員として委託費を受ける彼らに課された最大の任務は、所定の任期である3年を経過した後に、何らかのかたちで地域づくりに関わりながら確実に地元定着を果たすことにあります。インターン第1期生が任期を終えようとしている今、起業を志す者、農業経営に向かう者、行政に携わろうとする者と、それぞれに地元定着の方向性を明確にしつつあります。“地域の若者を受け入れ、地域に貢献できる人材に育て、地域に還元する”という本学の理念は、地域づくりインターン制度を通じ、より充実したかたちで実現しようとしているのです。まさしく、地域社会に貢献する能力を涵養し近い将来の職業選択をも見据えた大学での地域志向教育の典型例と言えます。本来であれば、学部4年間の教育でこれを実現すべきであり、本学の教育に責任を負う我々の立場からは忝怩たるものがあります。その意味では、学部教育をより深め、調査・研究能力を身につけるための大学院設置も視野に入れるべきでしょう。

地域づくりインターン第1期生として~3年の任期を終えて~

松本大学地域総合研究センター特別調査研究員
松本市地域づくりインターン 中央地区担当 濱 由佳子



私は松本市地域づくりインターンとして、松本城周辺の16町会から成る中央地区の下町会館で、地域住民の方々や松本大学生とともにコミュニティスペースの運営をし、家・職場・学校以外の第三の居場所である「サードプレイス」づくりを行いました。学生時代に観光ホスピタリティ学科の白戸ゼミナール生として活動を行っていた地区でもあります。地域において新たな人間関係を築くことにより、住民の方々や学生が互いに助け合うことで生活課題を解決に導く機会を設けました。

このサードプレイスづくりを通し、私が生まれ育った松本市には住民の方々が長い時間をかけ築き伝承してこられた歴史、文化、街並み、自然、特産物、人材といった多様な地域資源があることを学び

ました。また、国内外から訪れた旅行者、学習旅行に訪れた生徒が地域住民の皆様と直接関わり交流することにより、観光を通してこうした眠った地域資源が観光資源として活用されていることに気付きました。このことがきっかけとなり、今後は地域課題解決を目的に、松本大学生、松本市地域づくりインターンとして地域の皆様や松本大学の先生方に育てていただいたからこそ学ぶことのできた多様な地域の宝である資源を、観光を通して国内外のお客様に提供・発信し、地域活性化事業に携わって参りたいと考えております。



下町会館よいまちクラブを開催

地域と大学を繋ぐ防災に関わって

松本大学地域総合研究センター特別調査研究員
松本市地域づくりインターン 新村地区担当 一色 美月



松本市地域づくりインターンとして新村地区で活動して2年が経ちました。大学と地域を繋ぐパイプ役として活動して行く中に、防災訓練があります。松本大学は、松本市が指定している災害時などの「指定避難所」となっています。有事の際は住民へと開放されるため、大学と協力をしながら地区の防災訓練を行っています。

1年目は、大学生が無線機を携帯して住民の集まる「町会一時集合同所」へ向



新村地区との合同防災訓練

かう情報伝達訓練を行い、土地勘がない人が救援に向かうことの難しさを感じました。2年目は1年目の経験を活かし、「地図にコンビニなどの、見てすぐ分かる目印がほしい」という意見から、主要な道路だけが記載された簡易的な地図を使用し、地図上にルートを示す矢印で指定した上で道中の写真も載せました。この地図は、実際に使用した学生に「前回より分かりやすかった」と概ね好評でした。また、指定避難所での避難所設営訓練を行った中で、備蓄品の話題が出ました。今後は、こういった地図などの物品をどこに備蓄し、誰が管理し、どこまで周知するのかという仕組みが課題となっています。

残り1年となりますが、考え・提案・実践し次へと繋ぐ役割にしっかりと取り組んでいきたいです。

COC+学術講演会

「身の回りの放射線と福島原発事故の影響 ～環境・食品・健康～」開催

健康栄養学科長 木藤 伸夫

昨年12月22日、本学524教室において、COC+学術講演会「身の回りの放射線と福島原発事故の影響 ～環境・食品・健康～」を開催しました。一般の方々の参加を含め、およそ280名の参加がありました。

演者には放射線医学総合研究所で福島復興支援副本部長として、放射線科学の視点から福島県の復興を支援されている吉田聡博士をお迎えし、東日本大震災時に発生した東京電力福島第一原子力発電所

の事故以降、社会的にも関心が高い環境中の放射能などについて解説していただきました。放射線を理解するうえで基礎となる知識、考え方から講演を始められ、放射線が人体に与える影響や、実際に福島原発事故が環境中の放射能にどのような影響を与えたのかなど、ご自分のデータや実体験をもとに、丁寧に解説して下さいました。吉田先生の講演は、インターネットや様々な媒体によって広がる風評に惑わさ



れず、真実を見極める科学的な視点を涵養する意味でも重要な講演であり、学生にとっても、会場を訪れた一般の方々にとっても、不安や疑問を解消する良い機会になったと思われま

保育園給食の放射性物質調査を終えて ～被ばく線量の評価～

健康栄養学科 教授 杉山 英男

松本市立保育園の給食食材の放射性物質調査を平成26年9月より3年間実施しました。この間、計300食材ほどの放射能測定により福島原発事故等由来の放射性セシウム(Cs)などは検出されず、健全な食材が園児に提供されていることを示すことが出来ました。もし仮に、放射性Csが検出された場合には被ばく線量の評価を行うことが必要であり、通常、測定データの放射能

(Bq)をもとにして被ばく線量(Sv)への換算が行われます。「ICRP Pub.72」では、膨大な放射性物質各々について換算に必要な年齢別の係数値が示されており、その値は国際的に高い信頼性があります。大人と子どもでは経口摂取に由来する係数には数倍もの差があるため、同じ放射能でも乳幼児には高い被ばく線量となります。乳幼児に対する放射線防護対策が大切です。

COC+特別講演会

「食のホスピタリティ セミナー」開催

健康栄養学科 専任講師 長谷川 尋之

1月19日、COC+特別講演会「スポーツのビッグイベントに向けた食のホスピタリティセミナー」を開催しました。学生や近隣企業の方などおよそ150人の方に幅広く参加頂きました。

第一部は㈱Food Connectionの代表取締役で公認スポーツ栄養士でもある橋本玲子氏に「外国人アスリート・ゲストに喜ばれる食のおもてなし(ベジタリアン、グルテンフリー)」と題し、外国人の持つ多様な食のニーズの実例と管理栄養士にどのような取り組みができるのかお話しいただきました。第二部は㈱二宮の代表取締役社長である二宮伸介氏に「食文化や宗教の異なる外国人の食のおもてなし(ハラール食品とムスリム対応メニュー)」と題し、東南アジアをはじめとする訪日外国人の増加に伴うイスラーム教徒の食文化やハラール認証食品についてお話しいただきました。

訪日外国人をおもてなしするための実例を交えた貴重なご講演をいただきましたお二人の講師に改めて感謝致します。



「バレンタインスイーツ2018」今年も 好評のうちに終了

観光ホスピタリティ学科 教授 大野 整

高校生と本学の学生が行う合同販売会「バレンタインスイーツ2018～バレンタインまで待てない!～」を2月10・11日の両日、山形村の「アイシティ21」で開催しました。この取り組みは本学が主催して今年で5年目となる、高大が連携した恒例の冬のスイーツ販売会です。今年は県内7校の高校生と本学の短期大学部の金子ゼミ、支援会ゆにまるの学生が参加しました。会場には

高校生や大学生がアイデアを出した各地域の食材を生かしたスイーツが30種類近く並びました。支援会ゆにまるの学生は、近年安曇野で注目される夏イチゴと地元のハチミツを使った「コンフィチュール」を新たに販売し、安曇野夏イチゴのPRにも努めました。その他、バレンタインにちなんだ初恋をイメージしたケーキやクッキーも多く並び、多くのお客様で賑わいました。両日も好天に恵まれ、参加各校の商品は閉店時にはほぼ完売となりました。



研究ブランディング事業の背景とねらい

—手つかずであった現役世代の運動指導への着目—

研究ブランディング推進・実施委員長 等々力 賢治

本学の事業プランが、昨年11月に文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業」に選定されたことは、12月25日発行の本誌Vol.129でご報告したとおりです。5年間にわたって助成を受けるのですが、1年目の今年度は、選定決定が遅かったこともあり、今後4年間の本格実施に向けてデータ収集のための各種機器類の購入・準備、人的体制の整備、事業実施協力企業との打合せなどに追われています。

ところで、多くの読者の方は「運動指導」というと高齢者を連想するでしょうが、本事業が対象とするのは、主に企業で働く従業員（以下、現役世代）です。いったいなぜでしょうか？今回は、この研究事業を進めるにあたり、運動指導の必要性和有効性、企業との連携・協力が必要な理由と、その可能性について説明したいと思います。

平均寿命と健康寿命

我が国が世界的にもトップを争う長寿国であることは、各種メディアでも取り上げられ、広く知られているところですが、その平均寿命の長さに比べて、食事をしたりお風呂に入るといった日常生活を、他人の力を借りずに送ることのできる「健康寿命」に目を向けてみると、**図1**にあるように、男性で10年弱、女性では13年弱も短いことが

明らかになっています。ここに運動指導を中心とする健康づくりの意義と必要性があり、急速に増え続ける医療費削減が政策的課題として位置づけられ、種々の施策が展開されている理由があるのです。多くの自治体が進めている住民対象の運動教室などは、その典型であるといえるでしょう。

ところが、私たちは、運動指導の対象世代に注目することにより、さらによりいっそうの効果が期待できると考えています。

図1 日本人の平均寿命と健康寿命

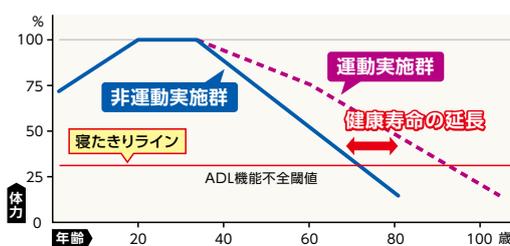


資料：平成27年 簡易生命表
平成27年 厚生労働科学研究補助金健康日21（第二次）の推進に関する研究

健康寿命の延長を目指して～現役世代への運動指導の有効性～

図2にあるように、人間の体力は生まれてから向上し続け20歳代にピークに達することは、さまざまな研究で明らかになって

図2 運動実施の有無と体力の変化



います。そして、しばらくそのまま推移後、現役世代の30歳代から低下が始まり、やがてはADL機能不全（自らの身体的な力だけでは日常生活を送ることができない）閾値、多少誇張して言えば「寝たきりライン」に達することについても同様です。にもかかわらず、これまでの運動指導は多くの場合、60歳以降の高齢者を対象とするものであり、ある意味「遅きに失した」状況にあるといっ

いでしょう。したがって、これまでほぼ手つかずであった現役世代に上手く指導の手が入れば、**図2**の水色ラインの非運動実施群から赤色ラインの運動実施群が示すように、寝たきりラインに達するのを大幅に遅らせることができると予測されるのです。

今回、研究ブランディング事業の対象として着目したのがこの点です。つまり、現役世代を対象に、所属企業の協力を得て運動指導を実施して、その効果を測定し明らかにしようということなのです。

企業との連携・協力が必要な理由とその可能性

多言するまでもなく、ここで問題なのが、企業がそれに応じてくれるか否かということです。ところが、この点について近年大きな追い風が吹きつつあります。それが、2015（平成27）年末に法制化された、従業員**50人以上規模の企業に対する年1回のストレスチェックの義務化**と、それをきっかけとする「健康経営」への注目です。

前者は、ICT企業などを中心に目立つようになったメンタルヘルス（心の健康）不調者の増加を受けて、その早期発見を企業に義務づけるものであり、後者は、企業自身が従業員

の健康づくりを経営課題として捉え、その維持・増進に努めるというものです。いうまでもなく、その背景には、国家予算に占める医療費増大の抑制と、企業の労働力確保や生産性向上、さらには企業価値の向上などの要因があります。メンタル面の不調などの病欠によって欠員が生じた際の影響は大きく、従業員の健康が企業経営上大きな課題であるのは分かりやすいのではないのでしょうか。

したがって、健康経営に取り組む企業が増加しつつあるのですが、健康診断の実施や検査・治療の推奨、分煙や禁煙など生活

習慣の改善などといったことはともかく、問題として指摘されるのが運動の実施だそうです。多くを語るまでもなく、ここに現役世代を対象にしようという本事業の切り口がありますし、可能性が広がりつつあると判断して事業を構想したところですが、付言すれば、それが、近年声高に叫ばれている「人生100年時代」への具体的対応策でもあるのは間違いありません。

以上、今回は事業の背景とねらいについて概観しましたが、次号では、3月に始める予定の事業の実際と進捗状況について、データ収集の項目や方法なども合わせ紹介させていただきます。

Bリーグの信州ブレイブウォリアーズと連携協定調印

副学長・人間健康学部長 等々力 賢治

去る1月15日、プロバスケットボールBリーグの信州ブレイブウォリアーズ(本拠地・千曲市)と本学の間で、「事業連携・推進に関する協定」が調印されました。調印式には、ブレイブウォリアーズ側から経営母体である(株)信州スポーツスピリッツの片貝社長をはじめ4名が、また、本学からも住吉学長をはじめ4名が出席しました。

協定調印に至った直接のきっかけは、本学の長谷川尋之専任講師(下記「研究室紹介」参照)が昨年同チームの栄養指導に関わってきたことにありますが、くわえて、Bリーグの使命である「地域に根ざしたスポーツクラブ」づくりに取り組む同チームと、「地域連携・貢献」を設立理念とする本学の方向性が一致したことにあります。

長谷川先生は、今後、松本会場で開催されるゲーム前後に補食提供に取り組む予定で、地元食材を利用した地産地消を促進し、地域でチームを強化する土壌をつくりたいと語っていました。その過程は、学生の栄養教育の場としてだけでなく、プロスポーツの勝敗をめぐる厳しい環境を肌で感じる機会ともなるでしょう。

本学はこれまで、地域プロ野球独立リーグの信濃グランセローズとサッカーJリーグ松本山雅の両チームとも協定を結び、機会ある毎に連携事業に取り組んでいます。今回の協定調印によって、それがいっそう多様化され、興味・関心のある皆さんにさらに魅力ある機会や情報を提供することになるでしょう。そしてそれは、地域プロスポーツを核とした地域スポーツの振興・発展、ひいては地域活性化の可能性を拡げることになるはずで、ご期待ください。



研究室紹介

健康栄養学科 専任講師
長谷川 尋之

運動栄養学で地域を元気にする

長谷川ゼミでは、運動部に所属する中・高校生からプロアスリートまでの幅広い競技者の栄養サポートだけでなく、健康目的で運動をする中・高齢者の栄養サポートも行っています。栄養サポートは学生が主体となり、中・長期的な観点のもとで、種々の測定結果に基づいて「体づくり」を中心とした定期的な栄養教育を行い、対象者個々の目標達成をサポートします。特に中・高校生では「食の自立」をキーワードとし、自ら望ましい食・生活行動ができるよう尽力しています。また、Bリーグの信州ブレイブウォリアーズでは「リカバリー」をキーワード



とし、平日の強度の高い練習と土日の連日の試合に耐えられる体づくりを目指しています。このような栄養サポートには様々な課題が山積しています。課題を解決するための糸口を見つけるため

に、時には実験室で現場を想定した環境や条件で生理学実験を行うこともあります。

私の研究課題の一つである「競技者の適切な水分補給管理」にも過去のスポーツ選手の栄養サポートの経験が背景にあります。競技中の水分補給が大切なことは言うまでもありませんが、常に動きのある競技現場では実験室と異なり、適切な質、量、タイミングで水分補給ができるとは限りません。理想のスポーツ科学と現実の競技現場を融合するためにも、「現場だけ」「実験室だけ」と偏りがないように、研究室を持った現在も可能な限り現場に足を運び、日々、新たな課題と向き合うようにしています。

最後に運動栄養学は身体活動量が多い人のための栄養学と定義づけられており、競技者という特定の集団だけを対象とするのではなく、健康増進を目指す人も対象者と考えます。私は、人々の健康に寄与してこそその運動栄養学であり、そうでなければ運動栄養学の発展もないと考えています。今後は競技者をきっかけに「運動栄養学」に関心を持ってもらい、地域の人々にも運動習慣や食習慣を見直してもらえよう取り組みを展開したいと考えています。



大阪体育大学大学院博士後期課程単位取得退学。種々のスポーツ現場を経て2017年から現職。スポーツ科学修士。公認スポーツ栄養士。
【専門分野】運動栄養学 【研究課題】競技者の水分補給 等

卒業研究・卒業論文発表会

大学4年間、短期大学部2年間の研究活動の成果を発表する「卒業研究・卒業論文発表会」が各学部、学科において行われました。

総合経営学部 総合経営学科

後輩たちにも刺激、深みのある発表の数々

総合経営学科 学科長・准教授 矢崎 久

総合経営学科では、平成29年度卒業研究発表会を2月9日に開催しました。学科では、経営について文字通り総合的に学ぶわけですが、今回の発表テーマは、創業と融資の実際、「道の駅」を拠点とした地域経済活性化の可能性、地域防災の拠点としての「道の駅」の可能性、マーケティングと商品パッケージの工夫、女性労働力の活用とワークライフバランス、FCチーム「松本山雅」についての経営分析、農協改革が及ぼす農業者への影響、JAにおける農産物の輸出の現状と課題、第四次産業革命と未来、地域発展と六次産業化ネットワーク、など総合経営学科での学びの範囲がひろく網羅されたテーマと、それに恥じない捻り多い内容の発表会となりました。



発表の場に臨んだ14組に与えられた時間はそれぞれ発表10分と質疑応答2分でしたが、ほとんどすべての組がこの時間内

に収まったことからは、時間を意識したスライドおよび発表用原稿の推敲が十二分になされていたことが窺われました。

また、会場には学科に所属している2・3年生も多く集まり、先輩たちの発表に耳を傾けメモを取り、時に鋭い質問をする姿が見られました。深みを感じた発表の数々に後輩たちにもよい刺激となったものと思われます。

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
飯沼 孝政	太 田	「外食産業で生き残り続けるための」[顧客志向経営]とは～(株)すかいらーくを事例に～
大谷 梨香	太 田	「数字で見る地方創生」～人口増加の地域から見たこと～
竹村 由妃	太 田	新規創業における日本政策金融公庫からの融資の流れ
常盤 大智	太 田	道の駅中条を拠点とした地域活性化-地域特産物「西大豆」から考える-
藤原 裕太	清 水	パッケージデザインによるマーケティング効果
小沢 菜緒	清 水	「道の駅」と防災-「道の駅」の新たな可能性-
奥原 眞音	葛 西	ワークライフバランスに関する一考察
永平 有花	葛 西	女性労働力の活用を中心として-
有賀 悠介	葛 西	ご当地グルメと地域活性化に関する一考察
土屋 友輝	葛 西	ご当地グルメと地域活性化に関する一考察
林 純平	葛 西	ご当地グルメと地域活性化に関する一考察
西村 峻	葛 西	サッカークラブチームの経営に関する一考察-松本山雅FCを中心として-
木下 栄作	葛 西	農協改革に伴う法改正が農業者に与える影響に関する一考察
武井 和哉	葛 西	農協改革に伴う法改正が農業者に与える影響に関する一考察
柿刈 拓実	成	JAにおける農産物の輸出の現状と課題
片桐 賢人	成	JAにおける農産物の輸出の現状と課題
大久保 光祐	成	JAにおける農産物の輸出の現状と課題
水野 佑紀	成	第四次産業革命と未来
清水 恒希	成	第四次産業革命と未来
花崎 友基	成	六次産業化ネットワークの及ぼす地域発展に関する考察
鷺澤 裕二	成	六次産業化ネットワークの及ぼす地域発展に関する考察

総合経営学部 観光ホスピタリティ学科

充実した卒業研究発表会

総合経営学部教務委員 准教授 畑井 治文

2月9日、観光ホスピタリティ学科の卒業研究発表会が行われ、大学での学びの集大成として、8つの研究室から合計13本の研究発表がありました。今年度の卒業研究発表会は、現行のカリキュラムが実施されてから2回目となります。観光マネジメント、地域政策、福祉マネジメントという観光ホスピタリティ学科の学びの3本柱を踏まえながら、例年以上に興味深い研究テーマが設定されていたように思います。

卒業研究発表会に参加した1～3年生は、先輩である4年生の研究発表を聞くことを通じて、大学での学びを見つめ直す良い機会になったのではないのでしょうか。先輩から後輩へと学ぶことの意義がリレーされることで、今後より一層、質の高い研究活動が実現できるようになるのではないかと感じています。卒業研究に挑戦した4年生



は、研究活動で培った論理的思考を活かしながら、卒業後、それぞれの場所で大活躍してくれることと思います。

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
池上 真央	井口 朋奈	畑 井
高山 峻一	井口 朋奈	畑 井
伊藤 悠太	白倉 沙貴	畑 井
深井 洗希	白倉 沙貴	畑 井
正木 輝	堀越 麻那	向 井
丸山 隼	酒井 八雲	向 井
鈴木 るり	高橋 優希	向 井
大野 由菜	小林 勇太	向 井
高橋 崇宏	花崎 友基	向 井
平林 洸	花崎 友基	向 井
川本 幸奈	遠藤 充浩	尻無浜
井上 雅博	土田 珠羅	尻無浜
成澤 進	土田 珠羅	尻無浜
宮阪 絢子	中島 楓	尻無浜
西本 沙織	倉島 誠	尻無浜
田中 菜々	倉島 誠	木 村
増澤 寛治	倉島 誠	木 村
升本 智子	倉島 誠	木 村
新井 諒	倉島 誠	眞 次
宮田 絢果	赤沼 愛	益 山
山田 彩夏	渡邊 祐奈	益 山
赤沼 大地	市田 達也	益 山
赤沢 大輔	栗田 万智	増 尾
鈴木 勝人	牛丸 みずき	増 尾
平林 大地	牛丸 みずき	増 尾
下川 紘史	工藤 一徳	山 根
倉澤 あや	岩垂 隆司	山 根
小松 和馬	中田 朋加	山 根
星野 徹	江口 和輝	山 根
飯島 史隆	櫻間 春佳	山 根
北田 史佳	利根 ありさ	山 根
宮澤 雅弥	利根 ありさ	山 根

研究課題の解決を目指して取り組んだ卒業研究 健康栄養学科教務委員 教授 高木 勝広



健康栄養学科では12月16日、卒業研究発表会を開催しました。発表会は口頭発表とポスター発表の2つの形式からなり、口頭発表は11題、ポスター発表は32題となりました。

口頭発表は、栄養素による遺伝子発現などの基礎研究分野から栄養調査・栄養教育といった実践的な研究分野など多岐にわたりました。いずれの発表者も物怖じせず、堂々と発表しており、頼もしさを感じました。発表後の質疑応答では、緊張しながらも誠実に対応している姿が印象的でした。一方、ポスター発表は参加者との距離も近く、なにげない質問などもしやすい環境なので、参観者との意見交換も盛んに行われ、終始和気あいあいとした雰囲気でした。

卒業研究は、おもに自分で設定した研究課題の解決を目指して行われます。発表会では自身がこれまで取り組んできた研究内容を分かりやすく発表することが求められ、これが卒業研究の最終課題となります。この卒業研究発表会を通して、卒業研究に対する真面目な取り組みの姿勢と、そして何よりも学生の成長ぶりに驚きと感動を覚えました。

■口頭発表の内容

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
浦野 あかり 重倉 叶恵	石原	ピーナッツアレルギーへの対応 ～ピーナッツバター風クリーム作成～
川上 真理奈 庭野 愛永	沖嶋	リンゴ口腔アレルギー症候群(OAS)アレルゲンであるMal d1 mRNA発現量の、長野県産リンゴにおける品種間比較
下田 一穂 瀬林 千晶	藤岡	災害時要配慮者(糖尿病・炎症性腸疾患)の備蓄調査と自助支援
上村 明 竹内 淳之助		
丸山 千晴 三澤 笑里		
吉田 優希		
佐々木 佳希	木藤	植物由来乳酸菌Lactobacillus sakeiが産生する抗菌物質について
内藤 素矢	福島	消極的安楽死～死に方の選択肢について～
佐久間 理緒 内田 奈緒子	矢内	視機能に対するドナリエラ・パーダウィル接種の影響
小池 彩佳 賈代 彩夏		
松田 愛奈		
徳武 宙	山田	各種ホルモンとビタミンAによるSHARPファミリー遺伝子の発現制御
伊藤 朱里	高木	スルフォラファンによる糖新生系酵素PEPCK遺伝子の発現調節機構の解析
三沢 春菜	廣田	管理栄養士養成課程の学生における開発途上国での国際協力に関する意識の向上に向けて
武田 彩奈 濱 音羽	成瀬	行事食に関する大学生の認知・経験および伝承意識について
石井 康一 川西 ひかる	杉山	セシウムの放射生態学調査と調理除染効果
早川 恵莉 林 亜由美		

スポーツと健康に対する様々な視点

スポーツ健康学科教務委員 准教授 河野 史倫

平成29年度卒業研究発表会が12月23日に開催され、20題の口頭発表と77題のポスター発表が行われました。スポーツ健康学科では2年生～4年生までのすべての学生が参加し、発表を聴講します。3年生は次年度の自分たちと重ね合わせながら、2年生はまさに専門ゼミ選択の最中であり、自身の専門的興味がどこにあるのかを問ひながらの聴講だったかと思えます。スポーツ健康学科の学びの3本柱である「予防医学・健康づくり」「ヘルスケア・スポーツビジネス」「学校体育・健康教育」に関する幅広い領域の研究に加え、トレーニング科学やコーチング、地域社会などを基盤とした本学科ならではのユニークな発表がありました。普段学んでいることを使って、実際にどんな視点で現場や社会に応用できるのか、4年生はその集大成を示してくれたと思います。普段はジャージ姿で授業を受ける学生が多いのがスポーツ健康学科



の雰囲気ですが、この日は3・4年生が全員スーツという厳粛な雰囲気になります。しかし、このような状況をものともせず、各発表に対してたくさんの質問が寄せられました。スポーツや健康というのは色々な関わり方があるのだと、あらためて実感しました。

■口頭発表の内容

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
大塚 麻由 根本	中野	中年者と高齢者を対象とした健康支援が健康観と生活習慣に及ぼす影響
浅田 翔太 田邊		下腿部の障害を予防する効率のよい歩き方
高橋 隼人 齊藤		サッカーの勝敗は何によって決まるのか？ ～欧州チャンピオンズリーグの試合におけるボール支配率を中心に～
崔 昇赫 等々力		日本サッカーのこれから -ジュニアサッカーに焦点を当て考察する-
傘木 萌香 岩間		生涯スポーツに繋がる体育授業の在り方について
堀原 準也 中島(弘)		幼児の活動量が運動能力及び土踏まず形成に及ぼす影響 ～A幼稚園の年長児を対象として～
中澤 佳大 齊藤		バスケットボール競技におけるリバウンドが勝敗に及ぼす影響に関する考察
金子 美咲 田邊		自転車駆動時のサドル高が下肢筋力に及ぼす影響について
竹元 玖乙 河野		長期間の全身振動を行ったラットの足底筋における運動応答性の検討
矢野 建治 根本		パワープレートを用いた振動刺激が筋硬度に及ぼす影響
杉山 恭香 岩間		スポーツビジョンが競技力に及ぼす影響について
濱田 佳歩 根本		股関節のストレッチングの有無及び最大脚伸展・屈曲筋力の割合が50m走タイムに及ぼす影響
大沢 育未 河野		骨格筋のエピジェネティクスを変化させる運動条件の検討
今井 南貴 中島(節)		高次脳機能障害における本人支援と家族支援
中村 駿 等々力		我が国における障害者スポーツの政策的課題 ～障害者が抱える現状から見た解決策～
倉田 雅美 中島(節)		水泳における生理的変化について
竹内 篤史 江原		自己血糖測定器の比較とフラッシュグルコースモニタリングシステムを利用した血糖値の変化の研究
御子柴 康太 中島(弘)		活動量及び運動能力が土踏まず形成及び足趾圧に及ぼす影響 ～一年中国児と年長園児を比較して～
福田 桜子 新井		学校教育に潜むジェンダー・メッセージー- 道德の資料集分析を通して-
百瀬 健渡 犬飼		幸福の正体と今後の社会の在り方の一考察 ～物質的発展と人間の幸福度の相関について～

松商短期大学部

松商短期大学部卒業論文発表会

松商短期大学部教務委員会主任 教授 矢野口 聡



1月24日、2年生の卒業研究の成果を発表する「卒業論文発表会」を1年生のゼミの時間を使って開催しました。2年生はすでに1月16日に卒業論文を提出しており、その中から9ゼミが成果発表を行いました。

発表者が昨年度より2ゼミ多く持ち時間に制限があった中、それぞれのゼミの発表内容は多岐にわたっていました。金子ゼミのおにぎり商品開発、矢野口ゼミのゲーム開発、伊東ゼミでの広報誌作成や、廣瀬ゼミのユニバーサルデザインのジーンズ制作など、成果を

制作物として形にしたものが目立ちました。その他には、あおり運転の防止対策やディズニーリゾートの成功要因、我が国の祝日、脳の仕組みからみる男女差といった事例や、文献に当たって考案したテーマや、実験を繰り返してデータを分析した握力向上に関する研究についての発表がありました。

1年生は、各発表者のテーマやプレゼンの仕方などに関して4段階の評価形式でアンケートに答えながら、それぞれの発表に興味深く耳を傾けていました。この発表会を機に、来年度の卒業研究に向けテーマなどについて考えてもらいたいです。

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
小林 瑞希	金子	Product development of rice-balls(おにぎりの商品開発)
宮澤 玲衣	矢野口	スクラッチを用いたゲームプログラムの作成
小原由希子	藤波	あおり運転の防止策
大谷 真生	伊東	広報誌発行で広がった世界
中澤 茉莉子		
浅川 竜聖	川島	鍛える部位によって握力に変化はあるのか!?
小岩井祐太		
佐藤 友樹	中村	東京ディズニーリゾートはなぜ成功したのか? ～世界のディズニーと比較して～
河野多恵子		
森田 紗南	小澤	日本の祝日について
石原 朋美	廣瀬	私の考えたユニバーサルデザイン ～ヴィンテージ ユニバーサルファッション～
上條 紘輝	中山	男女の性格の差～脳の仕組みから～
赤津 力也		
平林 由依		

大学院修士論文審査発表会

バラエティに富んだ発表で学問の多様性や研究の難しさと楽しさを展開

松本大学大学院 教授 江原 孝史



2月14日に松本大学大学院修士論文審査発表会を行いました。例年よりも多い8名が発表するため、1日がかりの発表会となりました。発表者の出身は、松本大学卒業生だけでなく、社会人、工学部を含む他大学卒者と、経歴も学歴も異なるメンバーでしたが、発表内容も筋肉の再生や培養細胞を扱う糖尿病の最先端の研究、宇宙環境を想定した動物実験から、ヒトを対象にしたものでは、ホエイ蛋白を被験者に飲んでもらい筋肉におよぼす効果を調べた研究、ジャンプに着目した研究、ヒトの遺伝性疾患まで、バラエティに富んだものでした。複数の疾患を発生する遺伝性疾患患児・家族に対するサポートに必要な質問票を作成する研究では、子供と親それぞれに対し、診断時期に応じた対応が必要不可欠なことがわかりました。筋肉の再生の研究では遺伝子改変動物も用いて、筋肉の隣にあるサテライト細胞に注目して再生メカニズムを調べ新しい知見が得られていました。糖尿病の研究では遺伝子の発現調節機構の解析が行われ、アミノ酸配列をさまざまに断片化して、遺伝子配列のどの場所が、遺伝子の発現調節に関与しているか突き止めていきました。学問の多様性とともな研究の難しさと楽しさを感じた一日でした。質疑応答も含め30分間で発表する形式で、スライドもそれ

ぞれに工夫がこらされていました。発表会後の審査では全員が合格しました。就職に関しては、企業、研究職、大学などこれも様々な進路に分かれており、修了生たちのさらなる飛躍が期待されます。

発表者	論文タイトル
青木 真人	TGF- β による SHARP-2 遺伝子の発現調節とATBF1 との相互作用 Regulation of the SHARP-2 gene expression by TGF- β and an interaction with ATBF1
腰越 元	トレーニングを行う中高齢者の筋肉に及ぼすホエイペプチドの影響について Study about the effects of Whey peptides to the skeletal muscle of the elderly in training
田中 みすず	6-MSITCによる糖新生系酵素 PEPCK 遺伝子の発現抑制機構の解析 Analysis of repression mechanism of the PEPCK gene expression by 6-MSITC
樋口 万里子	メラトニンによる糖新生系酵素 PEPCK 遺伝子の発現調節機構の解析 Analysis of regulatory mechanisms of the gluconeogenic PEPCK gene expression by melatonin
福井 龍太	競技種目における跳躍パフォーマンスの比較 -男子大学生に着目して- Comparison of jumping performance in sports. - Focusing on Male College sports athlete -
増澤 諒	遅筋および速筋の PGC-1 α 遺伝子座におけるRNAポリメラーゼII分布の相違とエピジェネティック制御 Response of RNA polymerase II distribution to acute running in fast- and slow-twitch skeletal muscles of adult rats
渡邊 敦也	筋損傷後のサテライト細胞増殖と再生筋線維機能の関連性追究 Relationship between satellite cell proliferation and fiber properties in skeletal muscle regeneration
井上 雄介	Prader-Willi 症候群患児・患者の親へのサポートに関するニーズ調査 - 質問票開発のための質的研究 - Survey on Needs to Support for Prader-Willi Syndrome Patients' Parents- Qualitative Research for Development of Questionnaire-

「第2回短大フォーラム」 全国の短大の教職員と学生が意見交換

松商短期大学部 准教授 川島 均

2月27日・28日、本学において第2回短大フォーラムが開催されました。短大フォーラムとは、元気で魅力ある短大にするためにどうすればよいかについて、全国の短大の教職員と学生が一体となって論じ合う場です。昨年、京都光華女子大学短期大学部で持ち上げられたものが今年には本学に引き継がれ、北海道から九州まで全国23の短大から総勢170人ほどの参加がありました。今年のテーマは「つながり」で、各短大の取り組みの報告を聞いたり、他校の学生や教職員とチームになって意見を述べ合いました。学生らはさらにこれまでにない「つながり案」について議論し、最後にチームごとに発表してもらいました。提案されたものはワクワクするようなものがズラリとあり、発表態度も堂々としていて、学生らの持っている力に改めて驚かされるという2日間になりました。



第3回APフォーラム開催

松商短期大学部 長 糸井 重夫

春の嵐で朝から雪交じりの強い風となった3月1日、第3回APフォーラムが514教室で開催されました。今回のテーマは、第2回APフォーラムと同じ「教育手法の改善とその評価」でした。また、今回は、本学が予定している「ディプロマ・サプリメント(学位証書補足資料)」を提示し、本学の過去1年半の取り組みについて中間報告も行いました。

講演は、金沢工業大学と京都光華女子大学短期大学部の教育改革とAPの位置づけや、取り組み内容についてでした。また、本学の中間報告では、「ループリック」による評価と、本学のディプロマ・サプリメントについての報告が行われました。

AP補助事業は、わが国の高等教育の在り方を抜本的に改革し、高等教育の質的転換を図る取り組みです。本学も他大学の情報を確認しつつ、今後も様々な教育改革の情報を発信していきたいと思っています。



》教育学部一期生1年生が保育園初体験

学校教育学科長・教授 岸田 幸弘

11月22日と29日に、教育学部学校教育学科の1年生65人が2班にわかれて保育園の参観実習を行いました。多くの学生は小学校教員を目指していますので、小学校に接続する保育園や幼稚園のことを知ることはとても大切なことです。基礎ゼミナールの



授業の一環として行われ、松本市立小宮保育園を訪問させていただきました。

初めに全員で5歳児の年長さんのクラスの活動を参観し、その後グループごとに0歳児から全てのクラスに入らせていただきました。また、一時預かりのクラスや保育園と隣接している「子どもプラザ」も見学することができました。小さな子どもたちに声をかけたりかけられたりして、上手に関わる学生もいれば、ちょっと戸惑いながら嬉しそうに話をする学生の姿も多くありました。

参観の最後に、小宮保育園園長の窪田郁子先生、小宮こどもプラザ子育てコンシエ

キャンパスを飛び出し
地域で学ぶ!

out campus study

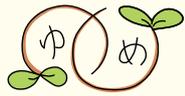
アウトキャンパス・スタディ

ルジュの鈴木豊子先生から講話をいただき、学生からも感想や質問が出され、良い体験学習になりました。今回のアウトキャンパス・スタディの全体計画や指導でお世話になった三澤禧美子先生からは、教員としての視点のみならず、社会人としてのマナーも教えていただきました。また教育学部の教員や関係職員全員が学生と一緒に参観したことについて、「教育学部の本気さを感じました」と感想をいただきました。教育学部では地域の現場を大切にして、地域から学ぶ、地域で学ぶ学修を進めていきたいと考えています。



学生の感想から

- 保育園では幼稚園のように勉強を教えるのではなく、生きる力をつけさせていることが分かりました。
- 小さな子どもたちの成長を身近に感じ取ることができました。
- その都度指示やアドバイスをするのではなく、ちょっとこらえて子どもたちに考えさせていることが印象的でした。



話と和と輪、想像と創造の空間 地域づくり考房『ゆめ』



地域づくり考房『ゆめ』は、学生が大学での学びを活かして地域と連携し、地域の課題解決に向けて主体的に取り組む活動を支援しています。

「第4回あるぷすタウン」に小中学生374人が参加



地域づくり考房『ゆめ』で活動する学生29名が実行委員となり企画・運営している「あるぷすタウン」を、今年は2月11日・12日に開催しました。今年で4回目を迎えるこの企画は、松本大学に2日間だけ現れる「子どもたちがつくる仮想の街」です。子どもたちは、専門的な仕事を体験し、給料(この街の仮想通貨「yume(ゆーめ)」)を稼ぎ、税金を納めます。そして稼いだyumeを使って、アカデミーで学んだり、雑貨屋や本屋で買い物をしてたりして過ごします。また、選挙によって市長や議員を決め、これからの街づくりを考えるための議会も行いました。この街に関わった2日間の延べ人数は、小学校4年生から中学生374名、企業・専門家170名、当日ボランティア(高校生、大学生、社会人)162名でした。



あるぷすタウンで 体験できる仕事(職場)

市役所、選挙管理委員会、ハローワーク、テレビ局、ラジオ局、新聞社、銀行、税務署、警察署、病院、鉄道会社、写真スタジオ、清掃会社、工務店、インテリア、本屋、文房具店、雑貨屋、美容院、ウェディング、サッカー選手、カフェ、パン屋、駄菓子屋、マッサージなど計30種の仕事が体験できました。仕事によって働く時間は違いますが、1時間働くと給料は20yumeとなります。働いた後、銀行で給料を受けとり、税務署で10%の税金を納めます。

稼いだyumeは何に使えるの?

仕事でも紹介した、雑貨屋や本屋、パン屋などの販売も行うブースで使うことができました。また、アカデミーブースでは、ゲームプログラミング、英会話、マジック(手品)、手芸(プラ板、ビーズ刺繍)、茶道、



稼いだyumeは銀行で受け取り



フロアホッケーなどを学ぶ事ができました。そして、今年は工務店さんの協力で遊園地にある遊具であるコーヒーカップが設置され楽しく遊ぶことも出来ました。

参加した子どもたち

これまでは200人を超える子どもを受け入れてきましたが、「働く場所」と「お金を使う場所」のバランスを考え、抽選で200人(2日間通して参加するので、2日間でのべ400人)の受け入れとしました。当日は体調不良などにより欠席した子どももいましたが、参加者は皆元気いっぱい楽しく参加していました。参加した子どもからは「普段体験できないことなどがたくさんできて楽しかった」「職業など本格的で楽しかった」「将来の夢の職業が体験できた」などの声

をいただきました。また何度か参加している子どもからは、「去年あった仕事がなく残念」「去年おやき屋をつくってほしいとお願いしたけど、今年もなく残念」「アカデミーが増えて良かった」など、期待して参加していた様子がうかがえました。

最後に

あるぷすタウン実行委員会の学生は、この日のために準備を進めてきました。企業・専門家の方と連絡をとったり、子どもたちが楽しく過ごすために街の仕組みを考えたりしてきました。この活動を通じて、それぞれの学生が主体性やコミュニケーション力、計画力など様々な力を得ることが出来たと思います。

(地域づくり考房『ゆめ』運営委員長 廣瀬 豊)

その他の活動については、地域づくり考房『ゆめ』のホームページをご覧ください。

地域の健康づくりを支援する 地域健康支援ステーション



地域健康支援ステーションでは、地域からの依頼を受けて健康づくりの支援やメニュー提案など実践的な活動を行っています。最近の活動をご紹介します。

フォローアップ研修会「アンガーマネジメント」を実施しました

当ステーションでは毎年1回、人間健康学部の卒業生が大学に集い、社会生活にすぐに役立つ内容の講演会を聞くとともに、恩師や在学生との交流を図る機会として、フォローアップ研修会を開催しています。今年度は2月17日、講師に関奈保子氏をお招きし「アンガーマネジメント～イライラや怒りの感情コントロール方法～」と題した講演会を開催し、学生及び地域の方々70名が参加しました。はじめに「怒り」は人間にとって自然な感情の一つで自分の心と身体を守るための防衛感情であるということ、アンガーマネジメントができれば、他人や自分

を傷つけることなく上手に怒りを表現することができるお話がありました。その後、アンガーマネジメントの3つの暗号「衝動のコントロール」「思考のコントロール」「行動のコントロール」について、自分自身の振り返りやグループワークなどを交えることでより理解を深めることができました。怒りを感じることは「してほしい」というリクエストの裏返しでもあるので、してほしいことを具体的に伝えること、自分のあたりまえと相手のあたりまえとは違うこと、怒りに対するいろいろな気付きの言葉を多く知っていれば知っている程、怒りをマネジメント



グループワークの様子

できることなどをお話いただきました。

「グループワークを通じて、人それぞれの違った意見や考え方を知ることができたのがよかった」「あまり向き合ってこなかった怒りについて理解できたので、これからは自分で怒りをコントロールしていきたい」など多くのポジティブな感想をいただきました。

栄養面での健康づくり支援活動

学生の考えた健康弁当が商品化、「世界健康首都会議」で完売

今年で5年目となる健康弁当のメニュー提案には、健康栄養学科の有志2名が参加し、メニューを考えました。弁当を製造販売する㈱王滝の木村雅子管理栄養士の支援



により「やさしさお届け弁当」をテーマに商品化し、11月17日に松本市で開催された「世界健康首都会議」で販売し、用意された250食は完売となりました。

購入した方からは「メニューに工夫が感じられ、彩りもよく美味しかった」「学生参加のよい企画、今後も期待してます」などの感想をいただきました。

食育イベントで学生が体験ブースを担当、学んだ知識をアウトプット

12月3日、茅野市で開催された食育イベントで健康栄養学科の学生2人が「しょっぱい!?!あま~い!?!体験」ブースを担当しました。砂糖水の温度や酸味添加での味覚の感じ方の違い、同じ塩分濃度のラーメンスープ

管理栄養士スタッフ 飯澤 裕美

と塩水の感じ方の違いを、それぞれ実際に飲み比べて体感していただきました。参加者が興味を持って体験してくださりいろいろ掘り下げた質問をされるので、学生達は学んだ知識を総動員して対応していました。「ラーメンスープは美味しいけど塩分のことも気をつけたい」などの声が聞かれました。



試飲で味覚を確認

運動指導の1年間を振り返って

今年度も近くは芝沢体育館から遠くは宮田村まで20箇所以上に出向き、運動指導を行いました。対象となったのは、市町村主催の介護予防運動教室や登山サークルの体力測定、精神障害者施設のレクリエーションなど延べ120回、2000人ほどのの方々でした。定期的に開催している運動教室では殆どの方が「運動後に体が軽くなった」「爽快感が得られる」との感想を寄せてください



運動指導の一幕。骨盤の動きを説明

ますが、「仲間のおしゃべりが楽しいから」「お出かけの機会となっているから」との声

健康運動指導士スタッフ 赤津 恵子

もあり、認知症予防等にも役立っています。今年度は3月19日の村井病院の精神疾患自立支援施設での軽運動レク指導と、3月29日の朝日村での運動指導が最後となります。運動指導の場は性別・年代・体力の高低、痛みの症状等が各様なため臨機応変な対応を求められますので、これからも5配り(目配り心配り気配り手配り体配り)のできる運動指導ができたかと考えています。

皆さまのお近くで、学生や専門スタッフ(管理栄養士・健康運動指導士)がお手伝いできることがありましたら、是非お声をかけてください。

教育学部で英語(中・高)の教員免許が取得可能に!!

次期学習指導要領では、平成32年度(2020年度)から小学校5年生・6年生で英語が教科になります。このため、小学校教員の英語力が求められており、新聞報道によると各地の教育委員会が英語力の高い人材の確保に力を入れています。平成29年度の公立小学校教員採用選考試験においても中学校や高校の英語教員免許を持つ受験者に対し、試験の成績で加点したり、試験の一部を免除するなどの優遇措置をとる教育委員会が増えています。

本学教育学部学校教育学科は、

中学校一種免許状(英語)と高等学校一種免許状(英語)の課程認定申請を平成29年3月に文部科学省へ提出、12月に無事認定を受けました。これにより、教育学部学校教育学科では平成30年度から従来ある小学校一種免許状、特別支援学校教諭免許状に加え、英語(中・高)の教員免許が取得可能となります。新たに認可された英語(中・高)の教員免許が、教員採用に向け有益であると確信します。

(英語免許状課程認定申請準備委員会 委員長 大石 文朗)

校友会からの便り

1月27日、本学522号教室に於いて、教職関係に就いている卒業生支援のための「校友会」が開催されました。住吉廣行学長から「松大から教育界に新しい風を吹かせて欲しい。」等の挨拶があり、懇談に入りました。まず、第1部として平成30年度教員採用試験合格者激励会が行われ、合格



第3部でのグループワーク

者から、実践したことや4月からの抱負などが語られ、恩師からはお祝いや激励の言葉が贈られました。第2部では、近況報告として課題や悩みが話し合われ、保小中の連携、先生方の健康問題、生徒指導、発達障害を持つ生徒への対応、自分自身の食事と健康等についてが挙げられ、先生方からは適切なアドバイスがされました。第3部では、職種ごとに3つのグループに分かれて、先生方も交えて和やかな中にも突っ込んだ懇談が行われました。参加者は、先生方現役生含め21名でした。

(教職センター 准教授 征矢野 達彦)

原山教育長と長野県教育について語る

12月7日、長野県教育委員会の原山隆一教育長と本学の学生との懇談会が実施されました。懇談会の前段で、教育長から、「長野県は県土が広く山間地もあるが、山間地に赴任してもがんばってくれるという人挙手をして!!」という趣旨の質問に、1人の学生が正直に挙手をしなかったところ、教育長から「いいねえ!!」の声が上がリ、一気に場が和みとても良い雰囲気です。懇談会が進み、教育長からは優しい口調ながらも、「教員になった時のこと、学校現場のこと」を考えさせられる鋭い質問が投げかけられましたが、学生は自分の意見をしっかりと述べていました。学生からは、「学校現場の教育環境や労働環境に関す

ること」や、「どんな教員を長野県は求めているのか」等、対応が難しい様々な質問が出されましたが、教育長の具体的で丁寧な回答に学生は納得していました。最後に教育長から「皆さんが教員になってくれればうれしい。期待している。」旨の発言があり、参加した学生は大変な充実感を持ち、懇談会を終了することができました。大学側としても、松本大学の学生の良さをしっかり感じ取っていただけたのではないかと感じました。

(教職センター 教授 小松 茂美)



国際交流事業「ウィンタープログラム」最多の参加者で賑やかに開催

1月29日~2月9日、松本大学ウィンタープログラム2018が開催され、アメリカや中国、台湾、韓国、マレーシアから総勢41名の学生が日本語を学び日本文化を体験するために松本大学を訪れました。参加者は教育学部や国際交流クラブの学生と一緒に授業を受けたり、おにぎりをつくったり、茶道体験でお抹茶の苦さにびっくりしたり、生まれて初めて見る雪景色に大はしゃぎしたりと日本(松本)を満喫してくれました。松本城や地元企業の見学、授業後のランチタイムな

ど、様々な場面で本学の学生が通訳をしたり付き添ったり、温かく接していました。たとえ語学が堪能でなくとも、自分ができる範囲でできることをするだけでも、ささやかですが温かな心の交流ができることを今年も実感できました。(国際交流センター 續 美穂)



2号館和室にて集合写真

部活動情報 Club・Circle

サッカー部

男子サッカー部、インカレで鹿屋体育大学に惜敗

男子サッカー部は初出場した第66回全日本大学サッカー選手権大会(インカレ)で、九州の強豪・鹿屋体育大学と対戦し、1対2(前半0-0)で敗れまし



た。初戦突破を果たすことはできませんでしたが、これまで10年かけてOB・OGが築いてきた「松大サッカー」を、全国に発信する第一歩にはなったのではないかと思います。

インカレの舞台は、この先何度でも行きたいと思える、まさに夢のような場所でした。今後は「インカレ常連校」を目指して、誠実に努力を積み重ねていく所存です。引き続き温かいご声援をよろしくお願いたします。(男子サッカー部 監督 齊藤 茂)

松本大学サッカー部監督を退任するにあたり

2年間という短い時間ではありましたが、私自身とても多くのことを学ばせていただきました。学生たちの純粋にサッカーにかける情熱によって、日に日に変わる成長を目の当たりにできたことはこれからの指導者人生の大きな励みになりました。みんなで目標を持ち、それに向かってやり続けることの大切さも改めて教わりました。そして、サッカー部をスタートさせチーム強化をしてきた齊藤先生やスタッフの皆さんのサッカー部を思う気持ちがチームのスタイルになっています。これからもこの歩みを止めることなく、頑張りたいと思います。皆さんありがとうございました。(岸野 靖之)



退職のあいさつ

本年度で10名の教職員が
本学を退職することになりました。

刺激に満ちた14年

総合経営学科 教授 太田 勉



金融業界からの転職で戸惑いもありましたが、振り返ってみると、多様な考え方に刺激されて人生が豊かになったように思います。人生100年時代の生き方が問われる昨今ですが、次のステージでは、消費者市民社会の構築に向けた活動を通じて、社会に恩返しができるかと考えております。長い間お世話になり、ありがとうございました。

お世話になりました。

松本大学大学院・健康栄養学科 教授 杉山 英男



福島原発事故の影響評価に関連する放射性物質調査を通して、ゼミ生とともに“地域貢献”の一旦に参画しました。私事で、所属した松本浅間CCでの景観と地元会員との触れ合いは印象的です。松本の夏は爽やかですが、冬の寒さは厳しいですね。今後は古巣の国立保健医療科学院で自適に活動です。皆さん、ありがとうございました。

3年半お世話になりました

健康栄養学科 准教授 花岡 佐喜子



2014年、当時私は佐久市に85歳を過ぎた夫の両親と暮らしておりましたが、松本市内の実家には88歳の父が独居していました。その年の後期から大学でお世話になることになり、毎週授業のある日は授業を終えて実家に泊まり、父の最後の一年半をそばで過ごすことができました。公私ともに貴重な経験を積むことができた3年半でした。本当にありがとうございました。

一心精進

入試広報室 室長 中村 文重



「松本大学は元気!」「常に前向きに改革をする大学!」こんなことを言い続けて営業活動(学生募集)に走り続けた14年間。「まだまだやりたい!」「こんなこともできる!」という気持ちは後輩の若手諸君に託し、地域に根差し、地域に支持される「真の地域立大学」として益々発展することを祈念しています。

育成と勝負と経験

硬式野球部監督 大塚 喜代美



監督・コーチとして11年間、部員のマナーや勝負で諦めない精神・技術などをNPB経験者、試合や対戦相手の監督・コーチ・選手の力をお借りし、個々が向上していく事を思い携わってきました。平成23年秋季リーグ戦で初の一部昇格、プロ野球や社会人野球・独立リーグ・企業で活躍する先輩達を目標に後輩達が受け継いでいくことを願います。教職員・野球部スタッフ・OB会・部員にはお世話になりました。

とても充実した13年間

総務課会計係 中牧 沙夜香



この度、一身上の都合により松本大学を退職いたしました。在職中は大変お世話になりました。この職場での経験を一生忘れずに新たな未来に進んでいきたいと思えます。松本大学のご発展とご活躍を祈念しております。この職場で働くことができたことを、心から誇りに感じています。長い間本当にありがとうございました。

感謝の5年間

基礎教育センター 日野谷 則男



義務教育、保育、新規採用教員の指導、と教育関係に携わってきたこの松本大学での5年間は、その時代の課題の巻き戻しをし、見直す機会を与えていただいた感謝があります。学び直しをしたい学生が実は多く存在し、自己の力を再発見しようと本気で取り組む学生の皆さんから、私自身が力を与えていただいた気がします。感謝です。ありがとうございました。

お世話になりました

地域健康支援ステーション 赤津 恵子



4年半という短い間でしたが、教員の皆様には温かいご指導を、職員の皆様にはカウチソファの肘掛のようなお支えを頂きました。本当に感謝しています。今後は、細々とした年金生活者層の一人として、ようやく終活したり病気を怪我をした日に病院に行ける生活ができそうです。そしてここでの学びを生かした社会貢献でご恩返しをしたいと思っています。

ありがとうございました

地域総合研究センター 小穴 悦子



松本大学では、学生の頃から様々な経験をさせていただき、自分自身が成長する事が出来た学びの場であったと思います。観光ホスピタリティカレッジの事務局として、ホスピタリティの向上・人づくりを目標に様々な講座を通して、様々な業種の方々との出会いが私のかけがいのない経験となりました。ありがとうございました。

感謝をこめて

地域づくり考房『ゆめ』 浅川 三枝子



4年間という短い間ではございましたが大変お世話になりました。これまで事務職には無縁だった上、年齢差もある学生さんと接する不安もありましたが、皆様に支えていただきました。学生さんのお話を聞き励ますこと、笑顔で挨拶することを心がけて参りましたが素晴らしい学生さんばかりで、ここで勤務ができたことに感謝で一杯です。本当にありがとうございました。

新任者紹介

よろしくお願いいたします

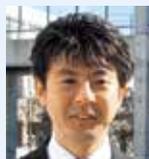
法人事務局 総合企画部 経理課 主事 片瀬 彩



長野市出身です。よく背が小さいなんて言われますが、仕事では大きな成果を出せるように頑張ります。

自主独立の精神で

教務課 主事 川久保 孝俊



仕事、プライベートともに自主独立を体現できるよう頑張ってます。どうぞよろしくお願いいたします。

松本の寒さに負けないよう、頑張ります

教務課 主事 野田 涼香



昨年8月に沖縄から移住してきました。早く仕事を覚えるように、頑張ります。よろしくお願いいたします。

幸せの青い鳥をさがして

観光ホスピタリティ学科 教授 山根 宏文

2009年4月より松川村の資源を活かした観光振興を行っています。2013年の厚生労働省の発表では、日本一長寿の自治体は男性が松川村とあり、長寿の要因について訪問調査すると「幸福度」が高いことがわかりました。幸福度の高さの要因について特別なものは何もありません。贅沢な暮らしを望むのではなく、健康で普通の暮らしが出来ることや、暮らしのなかにある家族の愛、住民との絆、自然・故郷を愛し、周りの些細な気配りや農の喜びや地域の食などの素敵なものに気付き喜び、それに感謝し

て幸せを感じて暮らしている人が多いことがわかりました。

世界幸福報告書レポートによると幸福度のベストテンには北欧の国々がすべてランクインされています。北欧の国々では、医療費・教育費は無料ですが、物価は日本より高く、消費税25%など高い割合での税金負担があります。そこから生まれたのが「ヒュッグをする」というライフスタイルです。ヒュッグとはデンマーク語で「温もりと心地よさで、そのために幸福や満足を感じる雰囲気」という意味で心の豊かさをとても大切に

しています。国民性としてよく紹介されるのは「教育によって自分の居場所が見つけれられる」「シンプルな生き方が好き・必要以上のものを望まない」「他人と分かち合うことこそが幸せ」などです。ニューヨークタイムスで「住民が死ぬことを忘れてしまった島」と紹介されたギリシア・イカリヤ島の村民も、2期連続女性長寿日本一になった沖縄県北中城村の女性も同様のライフスタイルです。

中国の古典に「足るを知る者は富む」という言葉があります。たくさんの物を手に入れるのではなく、与えられたものや周りにある些細な素晴らしいものにも気付き感謝をして満足を得るということでしょうか。

これが幸せへの近道であると思います。幼いときに読んだ「青い鳥」のように。

Information

2018オープンキャンパス 【途中参加・途中退出可】

次の日程でオープンキャンパスを行います。高校生はもちろん、保護者や教員の方もぜひご参加ください。

●短期大学部限定【16フィールド体験ツアー】

【日時】 4/22(日) 10:30~15:30(受付10:00~)

【内容】松商短大16フィールド体験、キャンパス見学ツアー、進路・入試・奨学金相談、保護者相談、ランチ無料体験 etc.

●松本大学・松商短期大学部

【日時】 5/20(日) 6/24(日) 7/22(日) 8/5(日) 8/19(日) 9/22(土) 10:30~15:30(受付10:00~)

【内容】松本大学・松商短大概要説明、学科説明、ミニ講義、トレーニングルーム体験、ランチ無料体験、キャンパス見学ツアー、個別相談(入試・授業・資格・就職・学生なんでも相談) etc.



無料シャトルバス運行

長野県内<松本駅、長野駅、上田駅、佐久平駅、岡谷駅、下諏訪駅、茅野駅、伊那(上伊那農業高校前)、飯田駅>・山梨県<甲府駅、小淵沢駅>、新潟県<新潟駅、高田駅>からシャトルバス運行 ※松本駅以外要予約

詳しくはホームページでご確認いただくか、入試広報室までお問合わせください。

www.matsumoto-u.ac.jp ☎0120-507-200

硬式野球部公式戦の日程

関甲新学生野球連盟 春季2部リーグ戦

※球場が変更になる場合があります。

節	月	日	曜	対戦カード	開始時間	会場
第2節	4	14	土	松本大学 - 埼玉大学	10:00	松本大学 野球場
		15	日	埼玉大学 - 松本大学	12:30	
第3節	4	21	土	松本大学 - 常盤大学	10:00	常盤大学 野球場
		22	日	常盤大学 - 松本大学	12:30	
第4節	4	28	土	松本大学 - 新潟大学	12:00	松本大学 野球場
		29	日	新潟大学 - 松本大学	12:00	
第6節	5	12	土	松本大学 - 茨城大学	9:30	松本大学 野球場
		13	日	茨城大学 - 松本大学	12:00	
第7節	5	19	土	平成国際大学 - 松本大学	12:00	平成国際大学 野球場
		20	日	松本大学 - 平成国際大学	12:00	

松本大学 教員免許状更新講習のお知らせ

松本大学では平成30年度、本学を会場に教員免許状更新講習を開催します。本学教員が講師を務め、必修領域2講習と選択必修領域10講習と選択領域22講習を開設します。

詳しくはホームページでご確認いただくか、本学教員免許状更新講習支援室までお問合わせください。

tel.0263-48-7260 email:menkyo.koshin@matsu.ac.jp

編集後記

卒業の季節となりました。学生の皆さんは、大学院・大学・短期大学部でそれぞれ2または4年間のキャンパス生活を過ごされたわけですが、やりきった人もそうでなかった人もいます。しかし、良かったことも良くなかったことも含めて、本学の講義・ゼミ活動・研究・部活動・社会活動等で様々な経験をしたことが重要です。学生生活で得た経験の「知」を、社会での今後の活躍に活かしてもらいたいと思います。また、本学との関係はこれで終わりではありません。本学はこれからも地(知)の拠点であり続けるので、今後も本学を活用して成長してもらいたいというのがすべての教職員の願いです。

(記・広報委員長 山田 一哉)



〒390-1295 長野県松本市新村2095-1
TEL 0263-48-7200 FAX 0263-48-7290
www.matsumoto-u.ac.jp